様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０４３４５

研究課題名（和文）現代青年の社会的脆弱性の構造の解明

研究課題名（英文）Research on the psycholgical vulnerability among present-day Japanese adolescents

研究代表者
岡田　努（OKADA, Tsutomu）

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号：１０２３３３３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：現代青年の対人関係における諸問題とパーソナリティ特性の関連について，調査研究を行った。2017年12月には大学生に対して自己愛，パーソナリティ特性，友人関係，自己意識，共感性，ランチメイト症候群傾向，ふれ合い恐怖傾向に関する調査を実施した。この結果は2019年度ヨーロッパ発達心理学会において国際発表された。
2020年度には趣味活動に没頭する青年の対人関係や自己の特性について検証するデータ採取を行った。この結果は岡田(2021)として論文化され発表された。
2018年度から2021年度にかけて，社会人および大学生に対して，友人関係，アタッチメント，自己愛に関する調査を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
パーソナリティ特性と自己愛，対人関係の特徴から，軽躁的友人関係を持つ青年は外在的な病理の特徴を示し，ふれあい恐怖的な青年は内在的な病理の特徴を示すことが示唆された。また適応的な青年は他者からどう見られているかを気にしないことが示された。このようにパーソナリティ特性と現代青年の適応-不適応の間に一定の関連が見られることが明らかとなった。
また，特定の趣味に没頭する「オタク」青年に関するデータから，「鉄道オタク」青年には一般に考えられてきた自尊心の低さが見られないことが明らかとなった。このことはオタク青年や行動を不適応とみなす従来の研究とは異なる知見であり今後の研究への足がかりとなった。

研究成果の概要（英文）：Several survey studies were conducted on the relationship between personality traits and problems in interpersonal relationships among contemporary adolescents.In December 2017, a survey on narcissism, personality traits, friendships, self-consciousness, empathy, lunchmate-syndrome tendency, and commu-phobic tendency was conducted with college students. The results were presented internationally at the 2019 European Society of Developmental Psychology conference.
In FY2020, data collection was conducted to examine the interpersonal relationships and self of adolescents immersed in hobby activities. The results were published in Okada (2021).From FY 2018 to FY 2021, we conducted a survey on friendship, attachment, and narcissism among working adults and college students.

研究分野：発達心理学，パーソナリティ心理学

キーワード：青年期　友人関係　自己

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現代の青年は「内向き指向」が強く打たれ弱いなどの脆弱性と，対人関係で他者の視線を気にして深い関わりを避けるなどのコミュニケーションスキルの不足がしばしば指摘されてきている。そうした脆弱性はまた青年自身の社会適応を困難にし，自己の発達にも負の影響を与えると考えられてきた。申請者は現代青年のさまざまな特徴を，誇大型から過敏型に至る自己愛構造と他者の視線に対する懸念の連続体上に位置づけた仮説を構想し，そのうち「ふれ合い恐怖的心性」と「ランチメイト症候群」と呼ばれる行動特性について，その構造と異同に関する実証的な検討を行ってきた。

ここで「ふれ合い恐怖」とは対人恐怖の現代的な形で，授業での発表など形式的な場面では困難を示さないが，友人との会食などより親密さが形成される場面に困難を感じそうした場面を避ける症状や行動である。また「ランチメイト症候群」とは，食事を共にする相手がいないことで，友人がいないように他者から見られ否定的に評価されることを極端に恐れ，隠れて食事を取るなどの特徴を指す。いずれも臨床的に重篤とまではいえない一般の青年にも共通して見られる状態と考えられる。

２．研究の目的

本研究ではこれまでの課題研究の成果を基に，現代青年の諸行動の位置づけを再検討し，青年の適応を促進する基本的な資料を提出する。

近年，アメリカ精神医学会の診断基準 DSM-5 において，パーソナリティ障害の診断基準において，健常者のパーソナリティ５因子モデルにおける特性との連続性を想定する考え方（代替 DSM-5 モデル）が注目されている。このモデルでは，脱抑制的で非同調的な特性を主とする「外在化」のパーソナリティ障害（自己愛性，境界性，反社会性）と，抑制的で否定的感情が高く内向的な性質の「内在化」型のパーソナリティ障害（回避型，強迫型）が挙げられている。

（なおここで自己愛性パーソナリティ障害は，その診断基準からみて，過剰な賞賛や特別扱いを求めるなど「誇大型」自己愛に相当するものと考えられ，他者の評価を過剰に気にして傷つきやすいなどの特徴をもつ「過敏型」自己愛とは異なると考えられる）。

この「内在化」「外在化」と「他者の視線を気にする程度」から現代青年の諸行動を以下のような形で位置づけることが考えられる。

すなわち，ランチメイト症候群は過他者から傷つけられることを強迫的に恐れ過敏性自己愛の特徴が高いことから「内在化」の特徴を強く示し，また他者の視線を気かけている。一方，軽躁的な青年は，他者の視線を気にしながらも外向的に振る舞っており外在化の特徴を示していると考えられる。また「ふれ合い恐怖的心性」を持つ者は内在化の特徴を示しながらも他者からの視線を気にする必要のない程度まで対人距離をとっている青年と考えられる。

先に述べたように，「内在化」「外在化」という要因は健常なパーソナリティ特性と連続しており，必ずしも不適応的な側面だけではなく，適応的な意味も含まれていると考えられる。

すなわち，パーソナリティ特性としての「神経症傾向」は状況を冷静に判断しリスクを回避する側面が含まれ，「外向性」の低さ（内向性）もまた内省的に自己をとらえる発達促進的な意味が含まれるだろう。また「他者の視線を気にする」ことは他者の視点を取得することで高い共感性を持つことにとも関係する。また「協調性」や「統制性」の低さはリスクをあえてとりながら挑戦していく積極的な態度とも関連しているだろう。従って現代青年の脆弱性からの克服過程を考えるならば，　図の各象限における適応的特質を強化することが，より適切であると考えられる。本研究では，このモデルの検証を通して現代青年の諸行動とパーソナリティ特性との関連を明らかにする。

３．研究の方法

モニター型の Web 調査による質問紙調査を実施した。調査の概要は以下の通りである。

2017 年度　740 名の大学生に対して以下の内容（尺度項目）について調査を実施した。

不安になる場面に関する尺度，自己愛的脆弱性尺度，BigFive 性格特性尺度，友人関係において傷つけ合うことに関する尺度，公的自己意識，共感性，ランチメイト症候群，ふれ合い恐怖的心性

2018 年度　20 歳台の社会人 741 名に対して 2017 年度と同様の調査を行った。なお不安になる場面に関する尺度は学校場面に特化した内容のため，今回の調査では省略した。

2019 年度　740 名の大学生に Web 調査による質問紙調査によって，現代青年の友人関係に関する尺度およびアタッチメントスタイルに関する尺度を実施した。

2020 年度　特定の趣味に熱中するオタクと呼ばれる青年について，友人関係と自尊感情，および自閉症スペクトラム傾向に関する調査を行った。

2021 年度　新型コロナウイルス感染症による友人関係への影響を考慮して 2017 年度調査のうち実施可能な尺度について大学生に対して調査を行った。

４．研究成果

(1)2019.8.30 Narcissistic personality and personality traits among Japanese adolescents.19th European conference on developmental psychology(Athens,Greece). PP099.
日本の現代青年の自己愛傾向とパーソナリティ特性，友人関係の関係について明らかにすることを目的とした。代替 DSM-5 モデル“alternative DSM-5 model for personality disorders”によれば，自己愛傾向は対立 - 同調性 antagonism-agreeableness 特性（協調性）と関連するとされている。Gabbard(1994）は自己愛傾向には，誇大型 oblivious と過敏型 hypervigilant の 2 つがあると示唆した。DSM において記述された自己愛性パーソナリティ障害の特徴はこのうち誇大型に該当する。よって過敏型においてはパーソナリティ特性との間で異なる関係を示すことが考えられる。

日本の現代青年は，友人から拒絶されることや，互いを傷つけることを恐れる傾向が指摘されてきた。岡田(2011)は，円滑な友人関係を希求し友だちと傷つけ合わないようにする青年は，注目賞賛欲求“need for attention and praise.”が高いことを見出した。

方法

オンラインの質問紙を用いて 740 名の大学生に，自己愛傾向，BigFive パーソナリティ特性，現代青年の友人関係についての尺度に回答を求めた。

結果

自己愛傾向尺度に基づいたクラスタ分析の結果 2 つのクラスタが得られた。

(1) 潜在的特権意識 covert sense of entitlement が高く，承認・賞賛過敏性 hypersensitivity to approval/admiration が低い群，(2)潜在的特権意識が低く，承認・賞賛過敏性が高い群　である。パーソナリティ特性については第 1 クラスタは第 2 クラスタよりも，向性において高く，誠実性 conscientiousness と神経症傾向 neuroticism が低かった。

調和性 agreeableness についてはクラスタ間での有意差は見られなかった。

友人関係については，クラスタ 2 の青年は第 1 クラスタよりも，友人への傷つけ回避と軽躁的関係が高かった。

結論

過敏型の青年は，内在型病理（Wright et al., 2012)の特徴を示していた。一方，対立 - 同調性の特性は誇大型，過敏型では弁別されなかった。

(2)2020.11.7-8　鉄道オタク青年の特性についての試論:自尊感情および対人関係との関連　日本社会心理学会第 61 回大会　発表論文集,15.

2021.3 単著　鉄道オタク青年の対人行動と自己に関する探索的検討　金沢大学人間科学系研究紀要　vol.13,27-44 https://doi.org/10.24517/00061717

本研究は鉄道オタクと呼ばれる青年の対人行動や自己のあり方について，鉄道を趣味としない者との比較を通して探索的な検討を行ったものである。

方法

412 名の青年に日本国内全国に在住する登録モニターに対する Web 調査を行った。趣味，鉄道趣味への熱心さ（鉄道オタク度），自尊感情，友人関係，自閉症スペクトラム傾向について調査を行った。

結果

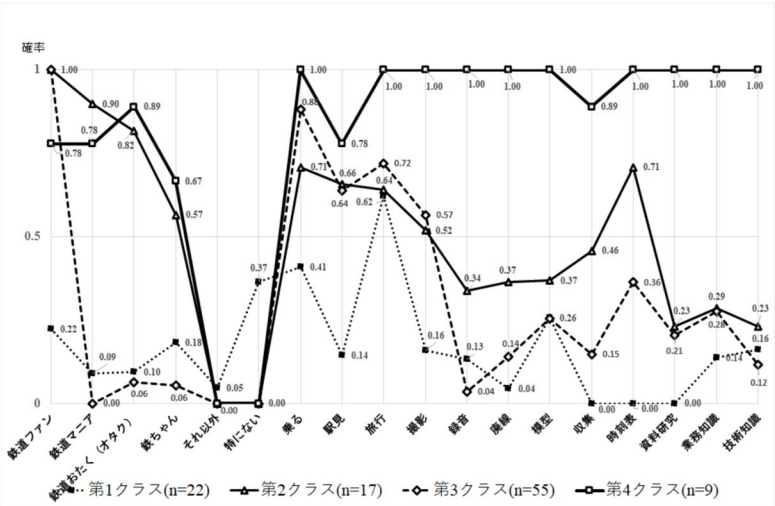

Figure 1 各クラスの条件付き応答確率

鉄道趣味者と非趣味者の間では，鉄道趣味者の方が友人関係の「距離確保」の程度が高かったが他の指標に有意な差は見られなかった。また潜在クラス分析により鉄道趣味者を４つのクラスに分類された。第１クラス（n=22）は，全般に低反応で，呼称においても「特にない」への応答確率が.37 で最も高く，活動内容としては「旅行をする」のみが.6 近い応答確率となる

など，鉄道趣味への熱中度が低い「緩い旅行派」と解釈された。第２クラス（n=17）は呼称として「鉄道ファン」「鉄道おたく（オタク）」という自認があり，「列車に乗る」「駅を見る」「旅行をする」「時刻表を読む・架空旅行を計画する」にも.7 台の応答確率が見られるなど，乗車や時刻表研究などに強い関心をもつ「乗り鉄オタク」，第３クラス（n=55）は第２クラス同様「列車に乗る」「駅を見る」「旅行をする」にへの反応は突出しているが「時刻表を読む・架空旅行を計画する」には.36 と応答確率が低く，また呼称においても「鉄道ファン」のみで「鉄道おたく（オタク）」という自認が見られないことから「乗り鉄ファン」と命名された。第４クラス（n=9）は，「鉄道おたく（オタク）」としての自認が最も高く，またほぼすべての趣味領域に応答確率が高く「鉄道全般オタク」と命名された（Figure 1）

各クラスを構成する回答者について，他の変数についてクラス間での得点を比較した。その結果，鉄道オタク度が最も高い第 4 クラスにおいて友人関係の「傷つけられることの回避」「距離確保」の程度が高かったが，他の指標に群間の差は見られなかった。

(3)2021.9.15-17 Personality traits associated with pathological features among contemporary Japanese Adolescents. The British Psychological Society,Developmental Psychology Section Annual Conference,poster No.14

日本の現代青年は円滑で軽躁的な友人関係を維持することに熱心であると言われてきた。

本当は一人ぼっちなのに，多くの友人がいるように振る舞う「ランチメイト症候群」と呼ばれる青年がいる。一方，「ふれあい恐怖的心性」にみられるように，仲間関係から遠ざかり情緒的関係を持たないようにしている青年もいる。

Okada(2019)は，過敏性自己愛の青年は，「パーソナリティ障害における代替 DSM-5 モデル」における内在型病理の特徴を持つことを見いだした。本研究では，Okada(2019)のデータを再分析し，友人関係，ランチメイト症候群，ふれあい恐怖と，公的自己意識，パーソナリティ特性との関係について内在・外在型病理との関連を検討する。

方法

716 名の日本人大学生にオンライン調査を行った。ビッグファイブパーソナリティ特性，公的自己意識，現代青年の友人関係，ランチメイト症候群そして，ふれあい恐怖的心性について調査を行った。

結果

パーソナリティ特性についてのクラスタ分析の結果以下の 3 つのクラスタが得られた。

(1)外向性が低く，神経症傾向が高い群，(2)神経症傾向が低く調和性 agreeableness が高い群，(3)外向性が高く調和性が低い群である。

第 1 クラスタはふれあい恐怖的心性が他のクラスタより高かった。一方，第 3 クラスタは軽躁的関係が 3 群中最も高かった。第 2 クラスタは公的自己意識とランチメイト症候群傾向が低かった。

結論

以上の結果から，軽躁的な青年は外在的な病理の特徴を示し，ふれあい恐怖的な青年は内在的な病理の特徴を示すことが示唆された。一方，適応的な青年は他者からどう見られているかを気にしないことが示された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 岡田　努	４．巻 13
２．論文標題 鉄道オタク青年の対人行動と自己に関する探索的検討	５．発行年 2021年
３．雑誌名 金沢大学人間科学系研究紀要	６．最初と最後の頁 27,44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00061717	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 岡田　努
２．発表標題 鉄道オタク青年の特性についての試論:自尊感情および対人関係との関連
３．学会等名 日本社会心理学会第61回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 岡田努・西村郁美
２．発表標題 アイデンティティのための恋愛」は本当にアイデンティティと関わるのか？
３．学会等名 北陸心理学会第55回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Tsutomu Okada
２．発表標題 Narcissistic personality and personality traits among Japanese adolescents
３．学会等名 19th European conference on developmental psychology（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 岡田努
２．発表標題 サブカルチャーの心理学（2）―オタクの幸福感―
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岡田努
２．発表標題 現代青年の心理的脆弱性の構造に関する検討：ふれ合い恐怖的心性およびランチメイト症候群傾向を中心にして
３．学会等名 日本心理学会第82回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡田努
２．発表標題 現代青年の対人関係－その神話と現実－
３．学会等名 日本教育心理学会第60回総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡田努
２．発表標題 現代青年の対人関係の問題
３．学会等名 北陸心理学会第53回大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Tsutomu OKADA
２．発表標題 Narcissistic personality and personality traits among Japanese adolescents.
３．学会等名 19th EUROPEAN CONFERENCE ON DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tsutomu Okada
２．発表標題 Friendship among present-day Japanese adolescents
３．学会等名 18th European conference on developmental psychology（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 岡田　努
２．発表標題 ふれ合い恐怖的心性と自己愛の関連についての試論
３．学会等名 日本教育心理学会第59回総会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 山岡重行・菊池聡・岡田有司・家島明彦・岡田努・渡邊芳之・杉浦義典	４．発行年 2020年
２．出版社 福村出版	５．総ページ数 254
３．書名 サブカルチャーの心理学:カウンターカルチャーから「オタク」「オタ」まで	

１．著者名 岡田努，浅川伸一，朝倉暢彦，浅田晃佑，浅野倫子，芦高勇気，蘆原郁，阿部高志，阿部恒之，雨宮俊彦，有光興記，有村達之，安西敦，安藤寿康，安藤花恵，飯田順子他	４．発行年 2021年
２．出版社 有斐閣	５．総ページ数 1002
３．書名 有斐閣 現代心理学辞典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関